チャレンジ！！オープンガバナンス 2016 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル（注）	No.	タイトル	自治体名
	8	もばらのまつり×おもてなしのココロ	千葉県茂原市
アイデア名（公開）	おもてなしをココロが生まれる場所づくり		

（注）地域課題タイトルは、COG2016 サイトの中に記載してある応募自治体の地域課題名を記入してください。

1．応募者情報

チーム名（公開）	シビックテックもばら	
チーム属性（公開）	○ 1. 市民によるチーム　○ 2. 学生によるチーム　● 3. 市民、学生の混成によるチーム	
代表者情報	氏名（公開）	磯野　智由

※　公開条件について

次ページ以降の「2．アイデアの説明」でご記入いただく内容は、内容を確認した上で、クリエイティブ・コモンズの CC BY（表示）4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC（表示ー非営利）4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。

（具体的なライセンスの条件につきましては、https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja、および、https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。https://creativecommons.jp/licenses/）

（注意書き）

＜応募の際のファイル名と送付先＞

1．応募の際は、ファイル名を COG2016_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2016 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin_padit_cog2016@pp.u-tokyo.ac.jp

＜公開非公開など＞

2．アイデア名、チーム名、チーム属性、代表者氏名、「アイデアの説明」は公開されます。

3．上記の公開は、内容を確認した上で行います。（例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません）

4．この応募内容のうち、「審査項目自己評価」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあり得ます。

5．「アイデアの説明」中に、文章、写真、図画などで応募したチーム以外に知的所有権が属する箇所がある場合には、法令に従った引用や知的所有権者の許諾を得るなどをした旨をそれぞれ注として書いてください。「審査項目自己評価」中も同様でお願いします。

＜チームメンバー名簿＞

6．チームメンバーは別紙のエクセルファイルに記載して提出してください。（2．の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は COG 事務局からは非公開です。詳細は別紙をご覧下さい。）

２．アイデアの説明（公開）

データや資料を活用して課題の具体化とその解決につながるアイデア（公共サービス）のストーリーを語ってください。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、だれがする、何をする、どこでする、いつする、どのようにするものなのかを考えて、各要素を入れて内容を描きストーリーを整理していくとよいでしょう。以下の欄内でご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

【誰がする？】

主体：市民　　サポート：市民活動団体、茂原市役所

【いつする？】

通年

【どこでする？】

茂原市内の榎町（えのきちょう）と昌平町（しょうへいちょう）という古くからある通りに面した商店街を中心に展開していく。両町は JR 茂原駅と市役所を結ぶ、約 1.5Km の商店街であり、現在では多くの店舗がシャッターを下ろしている。榎町には以前アーケードも架かっていたが、現在では維持管理に課題を抱え現在は撤去されている。昌平町では、「六斎市（ろくさいいち）」と呼ばれる市（いち）が毎月４と９の付く日に開かれている。六斎市は 300 年の歴史を持つ伝統的な市だが、出店数は年々減少し、現在では出店数も数軒という寂しい状況となっている。また、両町の商店街は茂原市の一大イベントである「もばら七夕まつり」のメインストリートともなっていることから、こちらを事業提案エリアとした。

【何をする？】

市民一人ひとりが、このまちに愛着を持ち、住んでいて楽しい、うれしいと感じ、訪れる方へおもてなしのココロをもってお迎えできる。このようにシビックプライドをもち積極的に街づくりに参加する人材を育成するための「場」づくりを行います。

【どのようにする？】

・ゆったりとした街歩きにより、普段車や自転車で通り過ぎてしまうと気づかないマクロな視点からローカルな課題への気づきが得られます。また、五感にうったえかけるようなアナログ的な尺度から見つけた課題を深堀してみることで、街の潜在的な魅力の発見につなげることができます。（例：地域コミュニティーの再生を目的とした「利用率の低いフラワーラック管理」により、賑わい空間の創出を行う。など）

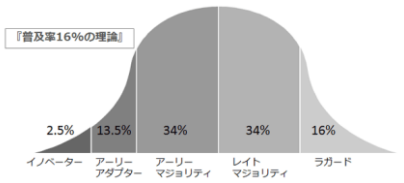
・まち歩きによって得た気づきの共有、課題解決の対話、ローカルな情報発信の場として「空き店舗や空き地を利用したオープンデータカフェ、オープンデータラボ、フューチャーセンターの運営」を市民によって行います。

・当面の間は、空き店舗活用の目途が立たないため、既存のコーヒーショップ等を会場とし、オープンデータを活用した取り組み事例の研究や市民活動団体同士のネットワークづくりなどを地道に行い、草の根的に市民の関心惹起を図る（革新者イノベーター：2.5%への浸透）

・茂原七夕まつりや桜まつり、子どもあそび広場、六斎市などの人が多く集まる機会を捉えて、期間限定でオープンデータラボ・フューチャーセンターブースを出展し、市民だけでなく、来訪者にもデータに基づく対話によるまちづくり、おもてなしについて考える機会を設ける。対話によるまちづくりにおいては、SIM ちば（対話型自治体経営シミュレーションゲーム）や HUG（避難所運営ゲーム）、DIG（災害図上訓練）等を活用する。

・草の根的に市民の関心が高まり、空き店舗オーナーの理解が得られるようになったら、クラウドファンディングや民間団体の助成金等で資金を確保し、空き店舗をリノベーションして、オープンデータを活用したまちづくりへのチャレンジ、データに基づく対話の拠点となるオープンデータカフェを整備する（初期採用者アーリーアダプター：13.5%への浸透）

・イノベーター、アーリーアダプターを合わせて、関心を持つ人が生産年齢人口（53,253 人／H28.12.1 現在）の 16.0%（約 8,500 人）を占めるまでに至れば、データに基づく対話によるまちづくりの共鳴が広がり、普及していくことが期待される。



(2) アイデアの論拠（公開）

アイデアの論拠（なぜこのアイデアにするのか）を、それをサポートする数値データ（実績、統計やアンケートなど数字であらわされるもの）や証拠（資料や計画、既存の施策など）（以下：総称して「データ類」といいます）などを含めつ、つご記入ください。数値データや証拠は出所を明らかにしてください。以下の 2 ページの欄内におさまるようお願いします。

■アイデアの論拠

茂原市の現況を把握する上での・空き店舗数、建築年数、物件所在地・商店街入込客数、年間売上高・単身高齢者数、災害時要援護者数・単独子育て世帯数といったデータを活用すると同時に、私たちは、まち歩きにより、現場から課題を発見すると同時に、まちの持つ潜在的な魅力を拾い上げ、市民目線での有効的なデータ活用を検討した。今年、市の認定制度と共に立ちあがった、市民活動団体「シビックテックもばら」は、子育て中の母親や、他の地域の学生にも参加してもらい、多角的な観点から、再度茂原市の抱える課題や魅力の再発見ができるような構成をとり、活動を行っている。

もちろんお年寄りや、その他の世代の多数参加があることが望ましいが、すでにある他の活動団体と協力をすることで、コミュニティの多様性を担保できるように考えている。

また、市では各団体を円滑に運営できるよう、講習会や団体間の交流会を開いている。

高齢化を抱える本市においては、スマートフォンの活用だけでなく、アナログ的な発信方法でオープンデータを活用していくことが、こうした活動の普及に大きなきっかけを与えると考え、まち歩きから気づき、活用するオープンデータの発展性に着目した。

おもてなしのココロを作ることにより、商店街自体に活気が戻り、賑わいを創出する。

ここで利用するデータは既設のフラワーラックの設置位置や数であり、そのデータをベースに、街歩きを行い、現在の利用状況を再確認し、整理して、今後その情報が見えるように管理していくこと。このことが、おもてなしのココロにつながり、もばらのまつり、ひいては茂原市の活性化につながると考えている。

このフラワーラックは、数年前に~~宝くじ財源をもとに、~~榎町、昌平町に設置されたものであるが、現在そのラック利用率がたいへん低く、魅力が一切感じられていないと同時に、利用されていないことから、周辺住民もその存在に気が付かない状況となっている。もし、この通りに点在するフラワーラックが当時のように花で埋め尽くされたとしたら、どれだけ賑わいを感じ取れることか。しかしながら、維持管理の難しさや、ラックそのものの劣化もあり、その価値が一切感じられず、むしろ、その粗末な状態が、景観に悪影響を及ぼしているようにすら思える。このフラワーラックそれぞれ~~方~~に魅力を見出し、私たち市民自らが意識して飾りつけるような活動が起きた時、街も蘇るのではないかと考える。その論拠として追っていく関連データは下記一覧に示す【データ】であると考える。また、このフラワーラックにおいても、変化の推移を「データ化＝見える化」していくことを想定しており、ラックの管理状態に指標を設定し、日々の管理の様子をタイムラグなく見える化する関係を構築してゆきたいと考える。

また、こうしたアナログ的な活動を行いつつ、この通りから自発的に形成されるコミュニティの場の延長として、空き家や空き地を利用したオープンデータカフェを設置し、さらなる発展を考える。

きっかけは、まち歩きで目にした、商店街に点在する小さなさびれたフラワーラックだ。その存在や利用方法、利活用のデータを ICT に変換し、広く拡散していくことができれば、多くの人にその魅力を伝えられる本当の意味でのオープンデータとオープンガバナンスにつながるのではないだろうか。

【データ】
・空き店舗数、建築年数、物件所在地
・商店街入込客数、年間売上高
・単身高齢者数、災害時要援護者数
・単独子育て世帯数
・フラワーラック位置情報
・フラワーラック管理データ
【資料】
・商工観光課データ
・高齢者支援課・社会福祉課データ
・子育て支援課・健康管理課データ
【施策・計画】
・中心市街地活性化基本計画
・高齢者支援計画・介護保険計画
・災害時要援護者避難支援プラン
・子ども子育て支援計画
・茂原市まち・ひと・しごと創生総合戦略
◈第一回街歩き隊◈

車いすや、妊婦、高齢者の疑似体験をして何か感じてれないかとみんなで歩きました。

左の写真はフラワーラック枯れた植栽におもてなしのココロは感じられません。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現にいたるプロセスとマイルストーン等、アイデア実現までの大まかな流れについて、以下の欄内におさまるよう、簡潔にご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

【アイデアを実現する主体】
市民（多世代の住民）、茂原市に来訪する他地域住民、市民活動団体、茂原市役所

【実現するプロセス、マイルストーン、流れ】
・Facebook 等の SNS を活用した呼びかけ、関心惹起
・フラワーラックの再生を通じて、おもてなしとは何か、気付いてもらう
・異業種交流会等の機会を活用した仲間づくり
↓
・既存のコーヒーショップやフラワーラック等を活用した定期的な集まりの開催（情報発信）
・茂原七夕まつり、桜まつり、子どもあそび広場、六斎市などの機会を活かした期間限定ブースの出展
↓
・ファンの獲得、SNS でのつながりを生かしたクラウドファンディングの模索
・民間団体等の助成金の活用の検討
↓
・物件（空き店舗）の選定
・コミュニティカフェデザインコンテストの開催
・地域住民（多世代）を巻き込んだコミュニティカフェ運営のグランドデザイン決定
↓
・オープンデータカフェの開設

(4) そのほか（公開）

アイデアのアピールポイントや、アイデア実現に当たっての制約があればそれとその当面の解決方法、さらに将来の発展可能性（例えば「将来的に xx という制約をクリアできれば、追加で○○ということが実現できる」など）について、以下の欄内におさまるよう、簡潔にご記入ください。

【アイデアのアピールポイント】

・茂原市では、今日まで行政内部で具体的なオープンデータにかかわる政策は行われてこなかった背景があり、今回の「チャレンジ！！オープンガバナンス」への参加によって、行政へのオープンデータへの意識啓発とそれによる地域課題の解決について働きかけを行うことが、最初の課題となった。

オープンガバナンスの文化がない街でいきなり「データによる地域課題の解決」ということを唱えても、そもそも「オープンデータ」とは何なのか、行政がそれを行う社会的道義、利活用の事例など「オープンガバナンス」のエッセンスを内部に浸透していくことからが求められた。平成 28 年 6 月 25 日、東京大学でのキックオフシンポジウム後、市役所内部の有志による自主研究グループは 8 月中旬のステップ 1 の課題提出までに 6 回の内部自主研究ミーティングを行ってきた。今回の COG への参加は、業務か自主研究の取り組みかという部分で内部の意見をオーソライズする事自体が壁であり、そのたびに人事部局と折衝を重ねた。ようやく市長から課題提出のお墨付きをもらった後もミーティングは業務として取扱わず計 8 回実施。6 月末からは合計 14 回の市役所内部の対話を行い、市民活動団体をサポートすることを心がけた。10 月に行ったまち歩きは日中イベントを行うことが必要であったため、市民活動団体から市へ協力要請をいただき、それをもって人事部局の了解を取付けた後、活動への協力体制を作り上げた。このような内部の意思統一の仕組みが市内部に無い中で、常に壁を感じてきた。ＣＯＧへ参加したいと考える他の自治体にも同様に内部のオーソライズを取る仕組みとしてノウハウを横展開できると感じた。こうしてＣＯＧ参加への事例が増えハードルが下がるともっと盛り上がる活動につながるはずである。

・市民活動団体の立上げをサポートし、市役所と市民の対話の機会をミーティングという形で都合 6 回行ってきた。また、有志により地域のシビックテックによる活動を学ぶフォーラムへの参加や地域の異業種交流会への参加を通じてオープンデータの地域への浸透ノウハウを今回のアイデア提出までのプロセスを通じて蓄積できたことが大きい。

・オープンデータの活用のためのハードルを、コミュニティカフェという場の創設により引き下げることができる

・カフェという場にコミュニティ、フューチャーセンター、子育て支援、認知症予防などの複合的な機能を持たせ、多様な世代の交流の場を創設することができる

・高齢者の多い街だから小さなアナログ的な仕掛けから、幅広世代に関心をもってもらい、ICT に繋げる。

【制約と当面の解決方法】

・空き店舗は廃業後も住宅として使用しているため、店舗部分の提供、にぎわいの創出に向けた協力への理解が得られにくい。当面は、既設のフラワーラックを再生することや移動式ワゴン等を活用して草の根的活動を展開し、協力への理解を得られるように努めていく。

【将来の発展の可能性】

・将来的に、オープンデータカフェ、子育て支援カフェ、認知症予防カフェのように、さまざまな交流の場が開設されれば、人的交流が活発になり、地域活性化が実現できる。